

日本語教室の「セルフ内省」活動における 学習プロセスの実態

—内省の観点とレベルに焦点を当てて—

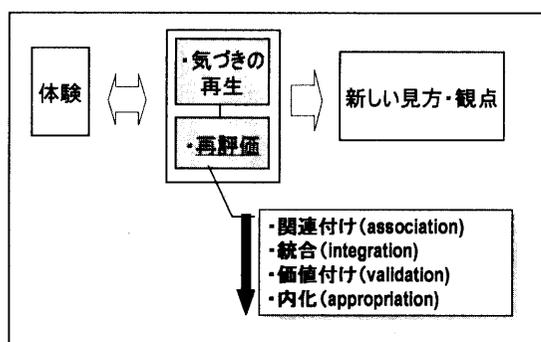
金 孝卿

1. はじめに

本発表で取り上げる「セルフ内省」活動とは、日本語教室で一定の学習活動が終わった後、その学習体験に対して、一人で振り返る一種の評価活動である。本研究の実践を例に挙げると、話すこと・聞くことの授業で、スピーチやディベートなど、日本語を使うメイン活動が終わった後、授業終了時に、その日の学習を振り返るために「内省シート」を書くという形で、セルフ内省活動を行った。内省シートの詳細は、実施概要で紹介する。

ところで、なぜ言語学習の場面で内省活動を取り入れる必要があるのだろうか。(Boudら1985)は、体験から知識を概念化する過程においては、「内省(reflection)が重要であると考え、次のような内省的学習モデルを示している(図1)¹⁾。

図1. 体験学習における「内省のプロセス」: Boudら(1985)



体験学習のプロセスにおいて、まず「直接的な体験」があり、それに対して振り返る「内省」のプロセスを経て、新しい観点を形成していくという。真ん中の内省のプロセスには、まず振り返ることで「そこで何が起きていたか」に気づく段階がある。次に、体験に対する再評価の段階がある。この再評価には、さらに「関連づけ」、「統合」、「価値づけ」、「内化」の4つの側

面があり、これらのステージを経て、新しい観点が形成される。このモデルは、色々な観点が関連付けられ、統合的に意味づけられる、そして現実の自分との関係性が見えてくることで、自分の内面に取り込まれ、さらに高次の観点(ルール)に向かっていくといった学びのプロセスを示すものである。本研究で取り上げる「内省活動」は、こうした内省のプロセスを促すチャンスを、教室で意図的に作ろうとしたものといえる。

2. 先行研究

学習者の内省プロセスが促されるかどうかを見る上で、まず、上記のモデルから次の点が考えられる。直接的な体験に対する「内省」には、その体験をどんな切り口で捉えるか、つまり様々な観点が関連付けられ、統合されていくという意味で、観点の広がり期待される。そして、より高次の観点を生成するという点から、内省の深まりが期待される。言い換えれば、内省には、レベルがあり、単に気づきだけでは学習が起きているとは言えないと考えられている。

では、言語学習/教育の文脈では、学習者にどのような観点の生成が期待されているのだろうか。Wenden(1991)は、自律的学習の観点から、学習者に形成してほしいメタ認知的知識を、タスク、ストラテジー、学習者自信の3つの側面から整理している。これらを満遍なく形成されることが、自律的学習を実行する上で望ましいと考えられているのである。こうしたメタ認知的知識は、体験と内省を繰り返す中で、すでに持っている部分が修正されたり、より強化されたりするものと考えられる。したがって、ある体験に対して、色々な観点から体験を捉えることが望ましく、それらの観点が関連付けられ、

新たな観点として生み出されることが求められるといえる。

言語教育の文脈において、「セルフ内省活動」はいくつかのタイプで、その可能性が論じられている。橋本（1995）、岡部（1998）では、self-assessment 活動の効用について取り上げている。ここでの内省活動は、日本人との会話場面を録画した資料を用いて、自分の会話実践の様子を内省するものである。学習者のコメントの内容を分析した結果から、学習者は自分の話す時の癖（フィラーや発音、イントネーション）、文法の間違い、文末表現などに気づくことができるという。その反面、コミュニケーションに役立つスキルには気づきにくいと報告している。石橋（2000）では、作文課題に用いた自己モニタリング活動を取り上げ、その可能性を示唆した。分析の結果では、学習者は自分の作文に対して、ある程度自己訂正が可能であるが、文法や表層レベルに留まりやすく、内容や構成などの深いレベルにはなかなか目が届きにくいと報告している。

どちらの研究においても、セルフ内省活動が学習者の日本語学習のプロセスの意識化や自律性の養成に貢献できる可能性に言及している。しかしながら、言語形式面のみを分析の対象にしており、他の側面の意識化やプロセスは示されていない。

その原因として、この「セルフ内省活動」そのものが、言語形式に注目しやす設定であることが考えられる。上で紹介したモデルから言えば、言語形式面についての気づきは、内省プロセスにおいて必要なステップの一つであると考えられるが、その他の側面にも眼が向けられるような「セルフ内省活動」のタイプが必要ではないだろうか。

一方、学習プロセス全体に学習者の内省の眼が向けられるように設定した「セルフ内省活動」も見られる。香港の英語教育において、Nunan（1996）は、質問項目で緩やかに構造化した内省ジャーナルを取り入れ、学習者の内省記録を質的に分析している。その結果、一連の活動で学習者は、言語運用とコミュニケーションな側面、手段としての言語と言語学習のプロセスに注目するようになっていくと報告している。また、一部ではあるが、自身の言語運用の間違いや問題点を評価できるようになっているという。こうした結果から、内省ジャーナルが内省プロセスを促す一つのツールとして意義があることを示している。

Donate and McCormick（1994）では、ポートフォリオ評価活動を取り上げ、より詳細な分析を試みている。アメリカにおけるフランス語教育の場面で、通常の文法授業の後、学習した項目が実際の会話場面でつかえたかどうかを証拠と共に提出するよう指示を行った。この種のポートフォリオ評価活動は、具体的な評価を求めるタイプのセルフ内省活動と捉えることができる。その結果、この評価活動で学習者は、必ず「自己評価」「目標設定」「自分の使ったストラテジー」「学習成果についての評価」の4つの要素に繰り返し言及しており、これらの観点が次第に拡張していくことがわかった。この研究は、微視的な分析によって、内省プロセスがどのような観点が生成され、どう深まっていくのかを示してくれるものとして意義がある。

このように、様々な形態で「セルフ内省」活動の可能性が論じられているが、実際に授業で試みたとき、どういった観点から評価を行えばよいただろうか。どのように学習者の内省の変化を読み取ればよいただろうか。

3. 研究の目的

本研究では、当該日本語教室における「セルフ内省」活動を通して、学習者は、内省の広がりりと深まりを見せるかどうかを明らかにする。その結果を踏まえて、当該「セルフ内省」活動の意義と課題を検討する。次の2点を研究課題とした。

- (1) 言語学習のどの側面に注目しているか
- (2) 体験を振り返ることによって生成される内省には、レベルがあるか。それは、どのように表れるか。

4. 本研究の実践

4.1 対象クラス

対象クラスは、日本の大学で開講された中上級の話すこと・聞くことのクラスである。このクラスは、特に短期留学生や大学院進学を目指す研究留学生を対象にしたもので、特に、アカデミックな場での「話すこと・聞くこと」について検討していた。対象者は、研究留学生・日本語日本文化研究生・交換留学生で、10名～12名の多国籍のクラス編成である。来日後6ヶ月から1年未満の時点での受講生である。授業は、日本語母語話者教師と筆者のティームティーチングで行われた。

れると考えられる。

最後に、この研究で示した内省の観点とレベルは、学習者個人の内省プロセスのみならず、学習者同士での相互内省促進を実現した場合に、それぞれの学習プロセスを検証する上で、一つの尺度になりうると考える。

注

1. 図1は、Boudら(1985:36)のモデルを筆者が簡略化して表現したものである。

参考文献

- 石橋玲子 (2000) 「日本語学習者の作文におけるモニター能力—産出作文の自己訂正から—」『日本語教育』106号、56—65
- 岡部真理子 Okabe, M.(1998) 学習者による日本語口頭言語能力の自己評価と自己評価の日本語教育への応用. Self-assessment of oral communication in Japanese

and the possibilities and limitations of incorporating self-assessment in language learning. 『日本語教育論集』14、国立国語研究所日本語教育センター、17—37

橋本博子 (1995) 「自己評価能力の育成：オーストラリアの元交換留学生の話しことばについて」『日本語論集』12、国立国語研究所日本語教育センター、p.20—39

Boud, D., Keough, R. and Walker, D.(eds) (1985) *reflection : turning experience into learning*. London: Kogan Page.

Donato, R. and D.McCormick(1994) A sociocultural perspective on language learning strategies: the role of mediation. *The Modern Language Journal*. 78, iv. p.453-464

Nunan, D.(1996) Learner Strategy Training in the Classroom: An action research study. TESOL JOURNAL Autumn 35-41

Wenden . A. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy* .London Prentice Hall International.

きむ ひょうぎょん／東京大学工学系研究科 国際交流室 日本語教室
hkkim@mva.biglobe.ne.jp